

日本語方言におけるある種の「方言圏」の課題 ——方言境界線の類型とアクセント分布との相関性——

安部清哉

キーワード：方言圏 (Kernlandshaft)、「内輪方言」、「京都式アクセント」、母音連続 (母音非融合)、1音節語の長呼

1 はじめに

日本の方言分布には、地理言語学的にみていくつかの未解決の課題がある。例えば、いわゆる「無型アクセント」の東西にわかれた周圈的分布や、二段活用動詞の残存分布が西側周辺部（四国・九州）にあって古語が残存しやすい東北側にはない偏在分布、また京阪アクセント地域が畿内と海を隔てた四国にまで分布しながら陸続きである中国地方の東部以西には分布していない、などの分布の理由である。

本稿で取り上げるのは、そのようなもののひとつであり、畿内から四国、九州、そして琉球列島にまでおよぶような、日本列島の中心部から斜めに沖縄におよぶような方言分布である。その分布パターンには、畿内からの広がりやの違いに応じて、いくつかの拡大ないし縮小の段階も認め得る。その領域はいわゆる「方言圏」（後述）とも呼び得る領域を形成している。この特異な「方言圏」の課題について、検討してみることにしたい。

2 「方言圏」という視点

方言の分布類型を最初に提示した柴田武（1963）は、等語線（方言境界線）の複数の重ね合わせによって方言の「区画」が考えられるとして、かつてのように述べた（下線や太線強調は本稿執筆者による、以下同じ）。

○複数の地図を重ね合わせてみると、A集落とB集落との間には一本の等語線しか走らないが、B集落とC集落との間には数十本の等語線が走るということが出てくる。等語線が幾本も重なることを仮に「等語線が太い」と言うことにすると、何枚もの地図を重ね合わせることによって、太い等語線によって囲まれた区域が浮かびあがってくる。これが、ドイツの方言地理学で言う Kernlandshaft である。地理学でもまったく同じ概念と操作によって Kernlandshaft を求めるという。わたしは仮にこれを「核区域」と訳した（柴田武「ドイツ・ザクセン地方の方言地理学」『方言研究年報3』一九六〇）。／こういう核区域が得られたときに、はじめて、単語の分布から日本をいくつかの区画に分けることができるわけである。」（柴田武（1963）

等語線の束（＝「等語線帯」と仮称する）をみつけ「Kernlandshaft」を設定していく方法が有力であるという。

もうひとつ方法論に関する発言を見てみよう。小林隆（1988）は「方言圏の方法」という見出しの元、以下のような考えを提示したことがある。そこには、上記の柴田（1963）にも見られた「Kernlandschaft」という概念が取り入れられている点でも注目される。

○「2）方言圏の方法

言語地理学は方言史の構築のみでなく、方言の分類にも新しい方法を開拓した。すなわち、言語地理学では、方言分布図を基に要素ごとに「等語線」を引き、それを重ね合わせてゆくことにより等語線の太

い束で囲まれた地域を求めることを考えた。このようにして取り出された等質的な方言地域を「方言圏」(Kernlandschaft)と呼ぶ。もともとドイツなど西欧で開発された方法であり、上に述べたような方言区画論の問題点を解決するものとして日本でも行われるようになったものである。この方法では周囲との切れ目に注目するのではなく、方言の中核とそれを中心とした等質的な広がりを問題にするから、分類の方向はいわゆる方言区画とは逆に、小地域から大地域へと向かうことになる。(柴田武「ドイツ・ザクセン地方の言語地理学」、グローターズ、W. A.「方言区画への出発」)。

この方法の長所は、比較的単純で具体的な手続きによって方言の分類を行える点にある。しかし、わが国では狭い地域に適用された例はあるものの、全国的視野のもとで使用された例を見ない。手段が具体的であるゆえに、かえって全国のような対象が広い場合には労力が必要なためであろう。

その他、分布図の重ね合わせによりながらも、境界線によって大区分から小区分へと区画してゆくという、方言圏と方言区画の両者の特徴をあわせもった方法もありうる（奥村三雄前掲書、p. 120【引用者注：奥村（1986）を指す】）。

なお、ここで、方言区画という境界線と方言圏という等語線の違いを簡単に述べれば、前者が方言の差異の存在するところに引く1本の分断線であるのに対して、後者が同じ方言が行われる範囲を囲む包圍線であるところに違いがある（徳川宗賢「等語線をめぐって」）。

前半では柴田氏の「核区域」を「方言圏」として紹介し、後半では“等語線を重ね合わせその太い束でかこまれた地域を求めて、取り出される等質的な「方言圏」によって「方言の分類」を考えるとする。ここで紹介されている（いくつか視点のことなる）方法、考え方を簡略にまとめると次のようになろうか。

○「等語線」を引き、それを重ね合わせることにより、等語線の太い束で

かこまれた地域を求めること。

- そのようにして取り出された等質的な方言地域（「方言圏」（Kernlandshaft））によって「方言の分類」を考える。
- 種々の境界線と方言圏との両者を重ね合わせで、さらに小さい下位区分を考えていく方法がある。

小林氏（1988）は、柴田氏があげた Kernlandshaft の概念を踏まえた発展的論を展開している記述と解釈されよう。「方言圏と方言区画両者の方法を合わせた方法」と新しい方法を提示している点も注目したい（後述。実は奥村（1986）ではこのようには述べていない。むしろ小林氏自身が奥村の記述をこのような方法として理解したと解釈される）。

小林氏の研究としても早い段階に柴田氏が紹介した Kernlandshaft の概念を「「方言圏」の方法」という題名をつけて提唱している点は学史的にも重要である。（その後の小林（2004）ではむしろ方言形成論的方法（後述）による方言史研究を展開しているためか、Kernlandshaft は触れられていないからである）。

このような柴田氏が紹介する等語線の束（「等語線帯」）を見つける方法は、中俣均（1997）も支持し、次のように言語それ自体による区分を行うには区画論における区画ではなく等語線重ね合わせ法が有効とする。

- 「従来の方言区画図を、言語による地域区分図であると考えことはできないのである。（中略）、それでは、どのようなものが、言語による地域区分図してふさわしいのだろうか？ 残念ながら、現在のところの筆者の考えは、ごくありふれたものでしかない。すなわちそれは、個別の言語分布図をもとに、それらを重ね合わせた結果として得られる等語線束を、目的と状況に応じて提示するものということである。しかしそれは少なくとも、方言区画なるものが成立することを自明の

こととは考えないという点、奥村が目指したような合理的・科学的な区画策定法の探求にはあまり生産的な意味はないと考える点、そして地図（分布図）という表現手段のもつ共時性を十分に認識すべきだとする点（すなわち、「区画図」によっては言語の歴史的系統を表現できないということ）で、これまでの考え方とは異なるのである。等語線束提示のための具体的な方法としては（略）柴田のいう言語地理学的方法に抛るほかはないであろう。」

ところで、この「方言圏」（柴田の訳では「核区域」）は日本での具体的な例は確認できない。「全国的視野のもとで使用された例を見ない」（小林（1988））ともあるので、柴田氏も具体的に提示した形跡がない。具体的提示例がないのでどの程度の質のものが該当するかという問題はあるが、本稿では、この「方言圏」的概念の応用としてひとつの「方言圏」に相当すると思われる方言区域を考察してみることにする（なお小林（1988）以降で、方言境界線の重ね合わせを实践している研究は多くはない）。

3 日本列島の中央内部に分布する「方言圏」——方言圏 α 、 β 、 γ

京阪式アクセント地域を含んでそれを囲む地域に、東西方言境界線ほどではないが、いくつかの特徴的境界線の重なる地域がある。

その領域を形作っている方言現象の重なりは、内側ほど多く（濃く）、外側にいくに従ってうすくなる。その内側の方言特徴から順に、言語現象と方言区画案との区別なく列挙すると、以下のようになる（イ・ウ以外はすべて音声現象であることも注意される。また、特にエ・カ・シは現代方言のアクセントの分類に関する相異なる区分解釈を示す）。最後のスは方言区画案の1つである。

A もっとも外側の分布圏——方言圏 α

- ア 一音節語の「長呼」の地域（【図1】LAJ「目」の長音地域で代表させる）〔本土+九州+琉球列島〕
- イ 「ヨム」（《数える》の意味）（【図1 & 図1②】LAJ. 69「数える」でヨムを使う地域）〔本土+九州+琉球列島〕
- ウ 「カザ」《匂い》（LAJ. 85「匂いを（嗅ぐ）」の「カザ」の地域）〔本土+九州+琉球列島〕【図2】
- エ 「tone アクセント」の地域（早田（1987））〔本土+九州+琉球列島〕【図3】

B Aの内側の分布〔本土+九州〕——方言圏 β （Aの琉球列島の分布がない）

- カ 「京都市式アクセント」の地域（平山輝男（1968））【図4】〔本土+九州〕

C A・Bの内側の分布〔本土（畿内+四国+北陸）〕——方言圏 γ +北陸（Aの琉球列島と九州の分布がない）

- サ 母音連続が融合しない特徴を持つ地域【図5】〔本土（畿内+四国+北陸）〕（上野善道（1989）の3地図の重ね合わせ図（琉球列島は対象外）、安部（2014））
- シ 京阪式アクセント（金田一春彦）【図6】〔本土（畿内+四国+北陸）〕
- ス 「内輪方言」地域（金田一春彦（1964））【図7】〔本土（畿内+四国）〕
- セ 「近畿式方言」地域（金田一春彦（1955）第1次方言区画案）【図7—②】〔本土（畿内+四国+北陸）〕

このうち、もっとも広いA（のア、イ、エ）の3つの分布域の外延部を重ねていくと（多少の振れ幅はある）、おおよそ「北陸—畿内—四国

（の1部）—九州の南西部—沖縄」へと、西日本を斜めにタスキ掛けに切り抜いたような細長い（一見奇妙な）等語線帯が現れる。この分布範囲の内側の領域をひとまず「方言圏 α 」と設定してみたい【注1】。

この方言圏 α の内部には、さまざまな方言現象の他、方言区画論における諸区画案も該当してくるのが特徴である。以下に簡条書きにしてみる。

- アクセントにおける平山輝男（1968）が「京都市アクセント」地域とした領域【図4】
- 「母音連続が融合しない特徴を持つ地域」【図5】（上野善道（1989）の3地図の重ね合わせ図：安部（2014））
- アクセントにおける京阪式アクセントの範囲【図6】
- 金田一氏の方言区画案（第2次案）における「内輪方言」【図7】

「方言圏 α 」において注目されるのは、アクセントの分類において、次のような特徴を持つアクセント分布範囲でも、その解釈によって範囲に3つの段階（上記ABC = α 、 β 、 γ での相違）が認められる点である。

- アクセントの（共通した）特徴＝下降位置と上昇位置の両方が型を決める two tonal registers を持つ範囲で、その特質を考慮すると、二型式（九州南西部）や、琉球方言が含まれ、広義の「tone アクセント」（早田（1987））の地域まで段階的に連続する。
- A：琉球を含むもっとも広い解釈＝「tone アクセント」（早田（1987））
〔本土＋九州＋琉球列島〕
- B：本土と九州の範囲＝「京都市アクセント」（平山輝男（1968））〔本土＋九州〕
- C：本土＝「京阪式アクセント」（金田一春彦氏ほか）〔本土〕

同じようなアクセントの特徴と言っても、どのように類型化しどのように地域的範疇を決めるか、あるいはアクセントによる「方言区画」をどの

ように考えるかによって、広狭が3段階に異なってくることがわかる。アクセントの類型的解釈上の漸移相（グラデーション）ともいえようか。

仮に、もっとも広い方言圏 α 側の視点から見ると、上記の三者・三地域は、段階的に、まず沖縄と西日本方言との間で自立的変遷等によってまず沖縄が切り離された残りがBの〔本土+九州〕地域（仮に「方言圏 β 」とする）、さらにそこから、例えば金田一氏の「方言区画」における「中輪方言」地域の成立等によって、九州と中輪方言側（四国+本州）とが各々独自に自律的変遷等によって分離して残されたのが、C〔四国+本州〕側（仮に「方言圏 γ 」とする）であった、という可能性もあることになる。また反対に、順次拡大していったのが、 $\gamma \rightarrow \beta \rightarrow \alpha$ であるという見方もできる。

特に、BとCの間、すなわち、「(平山) 京都式アクセント」の範囲と「京阪式アクセント」の範囲との間には、金田一氏の「中輪方言」と「外輪方言」との間の区画線に相当する等語線帯Ⅱが形成されている。そのような方言（等語線帯や方言区画）の相違の形成に伴って、B・Cが分離することになった可能性が十分に考慮されることになる。

また、上記のようなアクセントの特徴の段階的漸次的連続性、一音節語の長呼、および、上代にしかその「数える」という意味での中央での使用を確認できない「ヨム」の残存（即ち上代語以前に限定される）を抛り所とするなら、「方言圏 α 」の領域がもっとも古い段階でのもっとも広い分布領域であり、その後漸次、その領域を β 、 γ へと縮小してきた分布である蓋然性がまさるようにも思われる。

これらの範囲の分布形成は、どのように考えていったらよいのであろうか。ひとまず、以下の2点から位置付けてみたい。

- 1) 陸路よりもむしろ海を隔てた方への、日本列島を貫通するような斜めの分布の理由——畿内、四国、九州、沖縄
- 2) 年代的位置づけ——どのくらい古い年代を想定すべきか？

4 「内輪方言」圏の形成の一側面

上記 ABC の諸現象の分布範囲に関して注目されるのは、畿内から見ての距離において、その陸続きで東西に隣接する中国地方、中京地方には分布がないにもかかわらず、より遠方で、かつ、海路を、地域によっては幾重にも隔ててより遠方まで、同じ方言現象が連続しているという点である。

その点について、4 地域〔畿内+四国+九州南西部+琉球列島〕すべてについて一度に共通した解釈によって説明することはまだ容易ではない。安部（2017）において、ひとまず畿内と四国とにおいて共通した方言現象の分布が形成されうる要因を、以下のように解釈してみたことがる。

より狭い方言圏 γ は、方言圏 α より新しい時代での形式と解釈される。そして、方言圏 γ のように、畿内と四国だけが何らかの共通文化圏を形成している現象は、考古学や歴史学、民俗学、民族学、文化人類学を広く調査しても、いまのところ、次の一現象しか確認できていない。

それは「四国八十八箇所巡り」及び「西国三十三箇所巡り」という、畿内とも関わる宗教的「巡礼」が繰り返し行われた範囲であるという共通点である。方言圏 γ と 2 つの巡礼の範囲とは、多少のずれはあるものの、極めてよく一致している。この巡礼は一説では奈良時代・平安時代以降に徐々に浸透し、盛んになったとされる（頼富・白木（2001））。

この地域を巡礼する人々、特に都の僧侶・支配階層・貴族などは、文化的に影響をもつ都（奈良・京都）の文化と言葉とを（特に発音やアクセント）共に伝え、当該地域では、都の高度な文化の一部としてそれらを肯定的に受容したであろうと推定される。それが、海を隔てたこれらの地域の言語的「均質化」を徐々に形成する要因の、少なくともその 1 つとして機能したであろうことは推定することが許されるだろうと思われる。以上が安部（2017）での解釈であった。

この巡礼は、畿内側と四国側とはそれぞれ異なるものの、今も行われ

ている。現在でも、当該地域の方言の共通性を維持させているか、あるいは、共通性の意識を支えている小さな一要因として存続しているように思われる。

方言圏 α 内の一部としての成立要因としては別に検討が必要であろうが、少なくとも、この方言圏 γ の均質化を、ある時期に維持してきた一要因であったのではないだろうか。

現時点でも、この畿内と四国の地域に共通し、かつ、中国地方・中京地方とは異なるような民俗学、文化人類学などの現象は、この「巡礼」しか見出されないのである。

5 方言圏の成立の年代的射程

これらの方言圏（ α 、 β 、 γ いずれにせよ）の成立を考えるにあたって、その形成された時期はどの程度に考えていくのがよいのだろうか。

方言圏 α には「ヨム（数える）」という奈良時代以前からの古語が分布する。このヨムの語源と歴史が形成時期を考えるヒントとなるであろう。この地域は少なくとも、この意味での単語ヨムの歴史と同程度以上に古いと推定される。このヨム（意味は「読・詠・数・算・節（よ＝フシ）」の漢字の意味が該当する）には、数の計算の他に、文字の読解、和歌の読詠という文化的意味が含まれるので、奈良時代以前であったとしても古いものではなく、文化的に比較的新しい段階以降に形成された分布と推定できる。

奈良時代以前と推定される文化的な語が、飛鳥・奈良・京都を中心とした畿内地方からその西側にある中国地方へは拡大せずに、畿内から四国（や九州）を經由して琉球列島へ拡大したような現象は、調査してみたものの、管見の限りでは、見出しにくかった。つまり、方言圏 α 内において、古代に畿内側から沖縄へおよぶ範囲に、言語・文化が伝播した事実には容易には確認できないのである。

むしろ可能性としてひとつ想定し得るのは、それとは反対のルートの方であった。奈良時代以前・以後において、上記とは反対に、南西諸島側から本土方向への言語の伝播は、過去3万年の歴史上、1度だけ生じ得た可能性を指摘できる。台湾とその対岸の中国南東部を原郷（Urheimat）としていた Austronesian（南島）語族（以下、AN語族）は、約6～5000年前に太平洋に拡散を開始したとされている。一部は黒潮に乗って琉球列島（以北）に及んだのではないとも言われる。このAN語族の太平洋拡散という事実（定説）は、日本語の成立にAN語族の影響が認められるという定説とも符合してくる。すなわち、中国大陸南方沿海部（台湾を含む）の方言が黒潮に乗って南西諸島沿いに北上して流入した可能性が考えられることになる（オーストロネシア語族か中国語系かは未詳）。

ところで、このヨムの語源は、その意味的広さ（上記）、音声変化の可能性（d—j交替語形）から推して、中国語「読」ないしそれとも類似した何らかの言語と、同源なのではないか、という推定が可能である。この方言圏 α 内において、「d—j交替」の痕跡を留める現象には、例えば、「断定の助動詞「ダ」における方言圏 γ 内における断定の助動詞「だ」における「ダーヤ・ジャ対応」や、与那国島（ヨナグニ）を指す方言「ドナン」における「d—j対応」にも痕跡を残しているとも見ることが可能である。また、「ヨム」（数える）は中国語と同源だと見る研究者（増井典金（2010））はいるが、増井氏はその根拠を示していない（辞書記述ということもあるが）。「ヨム」（数）と中国語の「読」との関係では、音声的には「d-j交替」、意味的にも数える意を含意する点で共通性をここに指摘し得る。しかし、後掲の「方言圏 α 」の形成要因が、仮にAN語族や大陸内言語のいずれかの流入をも仮に考慮されるような場合には、今の中国語につながる単純な一言語だけでなく、古代における歌・和歌（の文化）、歌垣のルーツ、琉球音階等にもみられるいわゆる五音音階（ペンタトニック・スケール）の東南アジアとのつながり、なども考慮する必要が出てくる。それゆえ、例えば文化的に指摘されている雲南省ほかの大陸内部の少数民族

日本語方言におけるある種の「方言圏」の課題（安部）

族の言語や東南アジア全体の言語・文化（の複数の層＝strata）を視野に入れた広い考察が、改めて必要になってくると思われる。

この原（ur）・AN 語族の拡散をヨムの語源形成の要因と見る推定は、たとえ間接影響だとしても方言圏 α の成立理由の有力な仮説と考えられる。

6 「方言圏」（ α 、 β 、 γ ）と他の方言等語線帯（東西、南北、ABA）との新旧

この「方言圏」のもう1つの未解決の課題は、次の3つの束状の大きな方言境界線（以下では「等語線帯」と呼ぶ）の地域の、成立上の歴史的前後関係である（安部清哉（2014））。

等語線帯Ⅰ＝糸魚川・浜名湖線の東西等語線帯

等語線帯Ⅱ＝ABA 分布を成す「外輪方言」対「内輪方言＋中輪方言」との間の束状の等語線帯

等語線帯Ⅲ＝南北方言境界線の束状の等語線帯

これら3つの方言等語線帯のうち、東西方言等語線帯と「方言圏 $\alpha\beta\gamma$ 」は位置的には接触していないので（北陸のみ）、直接の前後関係には影響していないと解釈される。

それに対して、「外輪方言」対「内輪方言＋中輪方言」との間の等語線帯Ⅱは、位置的にも、方言圏 β と方言圏 γ の境界線とほぼぴったりと重なっているので、 β と γ との分離は等語線帯Ⅱの形成が要因になっている可能性が考えられる。

さらに、南北方言等語線帯Ⅲが存在するにも関わらず、方言圏 α 、 β は、その境界を北部日本側に貫通して、しかもそれを跨いだ南北での相違を方言圏（ α 、 β ）の現象はほとんど持っていない。そのことは、南北方言境界線の形成以降に方言圏（ α 、 β ）が貫通した可能性を示唆しているように思われる。

これらのことを組み合わせると、方言圏（ α 、 β ）は、少なくとも南北方

言境界線の主要な特徴が形成した後の拡大あり、さらに、 β と γ とは、等語線帯Ⅱ（ABA型分布）の形成によって、それ以後徐々に分離していったことが推定されることになる。一方、逆の順でも、方言圏 $\alpha \cdot \beta$ に南北差は影響しなかったという可能性も残る。

7 束状方言境界線の類型とアクセント分布の相関性

7-1 「無型アクセント地域」はABA型の外側Aに分布

主要な3種の等語線帯（東西、南北、ABA）が日本列島上に織りなす模様を地図に描き（【図12】参照）、それをこれまでの主要な方言区画案や諸方言分布等と照合してみると、その地理的一致など、いくつかの興味深い関連性を見出すことができる。

例えば、いわゆる「無型アクセント」の領域（ここでは東西にある広域の分布のみをひとまず対象とする）は、文化的中央からみて東西の遠隔部に周圏の分布を成しているが、周圏論的解釈にシンプルに適応できる南北（東西）の両極辺境（南端・北端）ではなくいわば中間的な距離に位置している。その中途半端で特異な、いわば不思議な位置にありながら、これまでその地理的配置の要因に対する説明は、かならず十分には成し得ないままであった（山口幸洋（2000）は周圏分布とするものの実体は南端・北端でないことの十分な説明はない）。

いま仮に、利根川以北の分布を「無型アクセント東部地域」（ENAと略）、九州側の分布を「無型アクセント西部地域」（同WNA）と仮称してみる。興味深いことに、ENAとWNAはどちらも共に、【図12】でのABA型等語線帯Ⅱ（安部2023）に臨接したその外側（北側と南側）に分布するという共通点を持つと見ることができる。

共にABA等語線帯Ⅱの外側であるという共通項を持っていることを見たが、Bの領域は弥生時代の文化人類学的特徴が顕著な領域であることが明らかな地域である（安部（1998）ほか）。つまりこれらの範囲は、方言

圏Bの領域（【図12】のBの領域）の方言よりも、古い時代の方言領域に限定されているということになる。

7-2 「無型アクセント地域」は2種類の区域に挟まれた分布

さらに各々を見ていくと、ENA（無アク東側）は上記のⅡ線の外側でかつ、ほぼ「非—北部方言地域」と言える範囲に限定されている。ABA型のⅡ（の東側）の境界と、南北型の北側の境界という2種類の区域に“囲まれた範囲”（“挟まれた範囲”）に収まっていることがわかる。

もう一方のWNA（無アク西側）も、偶然なのか、同じくABA等語線帯Ⅱ（安部2023）の南側（外側）に分布する。さらに方言圏 α （ β ）の九州南西部における分布領域外（北側）の範囲、即ち、方言圏 α （ β ）が及んでいない範囲に分布する。つまり、WNA（無アク西側）も、2つの区域に“挟まれた範囲”にほぼ収まっていることがわかる。このWNA（無アク西側）の範囲も、同じく、方言圏Bの領域の方言よりも、古い時代の方言領域に限定された分布をなしているということになる。

別の視点から両領域を規定するなら、WNA（無アク西側）は、B領域の方言現象の影響を受けず（受けること乏しく）、かつ、方言圏 β （ないし α ）での方言現象の影響が及ばなかった領域におけるアクセント体系ということになる。

また、ENA（無アク東側）は、同じくB領域の方言現象の影響を受けず（受けること乏しくあるいは遅く）、かつ、北部方言での方言現象の影響を受けることは少なかったアクセント体系であるという場合か（北東北にもENAが分布していたが北東北では消滅したという場合）、あるいはまた、同じくB領域の影響を受けること少なく（同上）かつもともと北東北には無型アクセントは分布を成さなかったアクセント体系である場合（無型アクは南部方言領域側にのみ分布し北部方言には元から無型アクセントは分布していなかったという場合）ということになる。

つまり、ENA、WNA共に、主要な束状方言境界線（等語線帯）との

位置関係から「説明可能な領域に分布している」ことが、明らかに見て取れるのである。等語線帯と方言の形成過程（アクセントを含む）とが無関係にこのような分布領域を形作った、とは考えがたい。このようなアクセント分布と方言境界線との相関関係に関する地理的特徴の具体的な指摘は初めてのものと思われる。

そしてこれらの点から見ると、山口幸洋（2000, 2003）が、無アクは周辺部に分布するから最古態であるとする見方とは異なる、また別の解釈があり得ることがわかる。相対的古さという点では共通する立場になったとしても、無型アクの形成過程は単純な最古態の残存というばかりではなく、方言の層の重層による形成という複数のパタンを視野に入れる必要があることになる。その想定し得る複数のパタンは、等語線帯の重層の複雑さも相俟って、かなりの複雑系の様相を呈していると考え得ることになる。

今後、無型アクの成立は、素朴な言語内部的自律変遷説のみではなく、これらの方言境界線・等語線帯の形成過程との整合性も視野に入れた、地理言語学的な解釈もさらに必要であることがわかる。

このように、等語線帯や方言圏による方言境界線や方言区画との関連から、アクセント地域の類型の配置関係を考察するとらえ方は、おそらく本論が初めてと思われる。

8 おわりに

方言圏 α および3つの大きな「等語線帯」の史的関係は、安部（2002、2014、2023）、ABE（2023）等から総合的にみていくと、例えば、仮に次の i、ii のような解釈を組み入れてみると、およそ下記のような通時的解釈が導かれる（安部（2023））。

- i) 方言圏 α （ヨム、長呼等）は等語線帯Ⅲの南北に跨るが南北での変異がみられないのでⅢの形成後に貫入したか
- ii) γ は B 領域の形成によって、 α ないし β 地域から分離し変化したか

- ① 等語線帯Ⅲ⇒ ② α の貫入⇒ ③ α による南北方言等語線帯の北部方言部分の「山陰」と「北陸、東北方言」の分断⇒ ④ B 領域の拡大とそれに伴う等語線帯Ⅱの形成⇒ ⑤ それによる《 $\alpha \cdot \beta$ からの γ の分離》+ 《北部方言の「北陸」と「東北」の分断》⇒ ⑥ 畿内等からの新たな方言の主に糸浜線西側での拡大⇒ ⑦ それによるさらなる《 α 内、 β 内での九州の分断》+ 《再度の北部方言の分断》+ 《B の領域内の東西の分離》⇒ ⑧⑥ による糸浜線東西型等語線帯Ⅰの蓄積

なお、この解釈の現時点での条件（解釈条件）としては、○これまで方言分布や方言境界線（等語線）の地理言語学的解釈がなされてきた事例の範囲での解釈であること、○それぞれの等語線の形成のより古いと解釈された事例やその多寡等を考慮した、あくまで相対的史的関係を試論として示していること、○新しい方言分布によって各等語線帯の位置での新しい方言境界線の形成は近代以降でも継続していると見なせるので（例、石井聖乃（2003）「えらび歌」、安部（2014.3b）も参照）、各等語線帯はいずれもその主要な形成を開始して以降は、その新規の形成は相互に併行して継続しているとみなされること、等のことを含んだ解釈であることをお断りしておきたい。

本稿のもうひとつの意義は、アクセントの類型とその分布地域とが、他の方言境界線や等語線帯が形作る区画とも地理学的に密接に関係していることを具体的分布地図で示した点にあると考える。具体的に言えば、アクセントの体系的類型的派生を、単なる理論的な考察だけではなく、例えば、【図13】の北陸の「中輪・京都式アクセント」（グレーの領域）は、【図12】の「西—北—B」区画でかつ「方言圏 β 」の領域内のアクセントということになるが、この領域でのどのような言語現象の影響を受けて形成されることになったのか、ということをも考察していく必要があることになる。そのように、具体的個々の地域や方言区画域ごとに、音声・文法・語

彙さらに民俗学・文化人類学的な現象において、歴史的に展開してきた諸現象とも照合が可能となり、それらとの照合による整合性を担保し得るような解釈への道筋を拓いた点と、その必要性を示した点にあると言えよう。

方言境界線と方言圏の歴史的形成過程については、今後も考察を継続していきたい。【注2】

【注1】その他、語彙ではLAJ. 102「旋毛」のツジなどの分布がこれに加えられるかもしれないが、LAJ. 85「カザ」（「匂いを（嗅ぐ）」の前半部）も含め、語彙の場合は後代における当該語単独での伝播による拡大の可能性も否定できない。それゆえ、語彙では、今回は中央語にある「ニオイ・カオリ」よりも古い語である可能性が推定できる「カザ」のみを取り上げ、それ以外は語彙項目を取ってあげていない。

【注2】 今後は、方言圏αの特徴である「一音節語長呼」「母音連続（非融合）」「tone的アクセント」「ヨム（の語源候補）」等を共有する言語、それらに近似する特徴をもつ言語を探索してみる必要がある。これらは一定の傾向を示しているようにも見える。また、興味深い点は、母音連続のような重音節構造を許容する点であるが（古代語では短母音音節が基本）、史前の古代日本語において、仮説としてではあるが、2重母音を許容していた段階（基層でも上層でもなく中層か（ABE2006）から1母音構造（軽音節）に移行した痕跡があると指摘されている点である。例えば、古い段階では4母音体系でエ母音は存在していなかったが、e母音はia→e甲類、ai→e乙類として成立して1つのエに統合した。古くはia、aiの母音連続が許容される状態があったことを示唆する。例えば、アイヌ語の神「カムイ」と日本語「神」は同源の可能性も指摘されるもののその史的前後解釈には定説がない。仮にuiが許容された段階があり（iは名詞化させる形状言）、後に日本語側でuiの縮約が必須になった段階でイ母音のみになったのがkamiの語源である、という一見方も蓋然性が高くなっていく（kamuiは、古代語でのkamu-形（カムサブ他）の語法の多さ・広さから見て日本語起源であって、非融合段階にアイヌ語に受容されたか）。

母音連続が許容された段階とは別に、日本語が史的段階の途中で短母音音節構造（CV）になった可能性も指摘されている。ABA分布のBの領域の形成には、B領域における文化人類学的特徴から見ると、半島部・大陸部からの大量の外来語の上層語的部分への流入が推察できる。それゆえ例えば、外来要素としてそのように影響した言語の構造が、方言圏α地域内でも、「中輪方言+内輪方言」地域における特に上層語での、「母音連続許容（非融合）⇒非許容（融合）」という変化を促進した可能性も想定できることになる（そのような影響が上層語にあっ

でもなお、なぜ現在まで「内輪方言」の口頭語（現代語での言わば文体的下層）で「非融合」が頑強に維持され続けているのかという問題は別に検討課題となる）。

「一音節語長呼」は、例えばその平均的物理的発声時間と、中国語の一声での単音の発声時間との実験音声学的調査も、比較・対照研究として興味深い。

また、例えば、「内輪方言地域の京阪式アクセント」を仮に基層と仮定した場合には、次のそれぞれのアクセントの形成も検討課題となろう。

○内輪京阪式アクセントに、南北型の北部方言の音声のどのような特徴が影響すると、今の「北陸の京阪式アクセント」になるのか。

○内輪京阪式アクセントが、外輪方言の九州西部では、そこでのどのような音声特徴の影響を受けると平山氏が「京都式アクセント」とも位置付けるような特徴（京阪式とも東京式とも分類できる面があるとも見える）をもつアクセント地域になるのか。

今後は、図 12 の各区域における方言の重層の様が研究課題となってこよう。

【参考文献】（方言区画論の研究文献は安部（2014）参照）

安部清哉（1998）「日本列島におけるもう一つの東西対立境界線“関東・越後線群”」『フェリス女学院大学文学部紀要』33

安部清哉（1999）「日本列島におけるもう一つの方言分布境界線“気候線”」『玉藻』35

安部清哉（2002）「方言地理学から見た日本語の成立」馬瀬良雄監修『方言地理学の課題』明治書院、262-276

安部清哉（2003）「関東における日本語方言境界線から見た河川地形名の重層とその背景」『国語学』54-3、101-116

安部清哉（2008）「アジアの中の日本語」小林隆編『シリーズ方言学1 方言の形成』岩波書店、123-167

安部清哉（2014）「方言区画論と方言境界線と方言圏の比較研究」『人文』13、21-55

安部清哉（2014.3b）「日本語の『南北型方言分布』の地理言語学的解釈」『東洋文化研究』16. 85-133.

ABE, Seiya, 2006, On the “Monsoon Asia Substratum” and Altaic Superstratum in East Asia: A Stratificational Approach to Geolinguistics, pp. 79-96, Guido Oebel edit., Japanische Beiträge zu Kultur und Sprache, Studia Iaponica Wolfgango Viereck emerito oblate, (The Festschrift for Doc. Wolfgang Viereck), pp372, LINCOM GmbH, Muenchen, Deutschland. (「東アジアにおけるモンスーン・アジア基層語とアルタイ語の上層語について——地

理言語学への言語成層論的アプローチ——」)

ABE, Seiya, 2023printing, The Classification and Division of Japanese Dialects, *The Handbook of Japanese Dialects*, De Gruyter Mouton.

井上史雄 (2001) 『計量的方言区画』 明治書院

井上史雄 (2002) 「方言区画論の再生」 『21世紀の方言学』 国書刊行会、73-86

大西拓一郎 (1997) 「活用の整合化」 加藤正信編 『日本語の歴史地理構造』 明治書院

大西拓一郎 (2002) 「全国方言の分布」 『朝倉日本語講座 10 方言』 朝倉書店、121-140

大西拓一郎 (2002.12.20) 「方言表現法の分布類型と分布形成」 『表現法の地理的多様性』 国立国語研究所研究発表会資料、35-44

大西拓一郎 (2006) 「言語地理学の再起動」 真田信治監修 『日本のフィールド言語学——新たな学の創造にむけた富山からの提言』 桂書房、80-93 真田 (1970)

大橋勝男 (2008) 『日本海沿岸方言音声の研究』 おうふう

奥村三雄 (1986) 「方言区画論」 『講座方言学 2 方言研究法』 国書刊行会、117-135

加藤和夫 (2002) 「言語地理学の再生」 『21世紀の方言学』 国書刊行会、113-124

加藤正信 (1977) 「方言区画論」 『岩波講座日本語 11』 岩波書店、41-82.

加藤正信 (1990) 「方言区画論の歴史」 『日本方言研究の歩み 論文編』 角川書店、173-188

木部暢子他編 (2013) 『方言学入門』 三省堂

金田一春彦監修・秋永一枝 (1983) 『明解日本語アクセント辞典』 第2版 (表紙裏掲載図)、三省堂

熊谷康雄 (2008) 「方言形成研究の方法としてのシミュレーション」 小林隆編 『シリーズ方言学 1 方言の形成』 岩波書店、169-216

小林隆 (1988) 「4方言の分類」 金田一春彦他編 『日本語百科大辞典』 大修館書店、941-957

小林隆 (1991) 「方言東西対立分布成立パターンについての覚え書き」 国立国語研究所報告 103 『研究報告集』 巻 12、165-189

小林隆 (2002) 「日本語方言形成のモデルのために」 馬瀬良雄監修 『方言地理学の課題』 明治書院、248-261

小林隆 (2004) 『方言学的日本語史の方法』 ひつじ書房

小林隆 (2008) 「方言形成における中央語の再生」 小林隆編 『シリーズ方言学 1 方言の形成』 岩波書店、1-42

佐藤亮一 (1982) 「方言語彙の分布—『日本語地図』に見る—」 佐藤喜代治編 『講座日本語の語彙 8 方言の語彙』 明治書院、57-82

- 佐藤亮一（1986）「方言の語彙—全国分布の類型とその要因—」飯豊・日野・佐藤編『講座方言学 1 方言概説』国書刊行会、149-179
- 佐藤亮一監修（2002）『方言の地図帳』小学館
- 佐藤亮一（2018）「方言分布」日本語学会編『日本語学大辞典』東京堂
- 真田信治（1979）「標準語の地理的背景」『日本の方言地図』中公新書
- 真田信治（2002）『方言の日本地図 - ことばの旅』講談社+α新書
- 柴田武（1963.3）「単語の全国分布」『人類科学』15、新生社、149-164
- 柴田武（1964）「方言区画とは何か」『日本の方言区画』東京堂、5-22
- 東条操（1950.10）「方言圏論と方言区画論」『国語学』4、1-12
- 東条操（1966）『国語の方言区画』東京堂
- 徳川宗賢（1964）「等語線をめぐって」『日本の方言区画』東京堂、477-497
- 徳川宗賢（1981）『言葉・西と東』7章「ことばの地図」中央公論社
- 徳川宗賢（1993）『方言地理学の展開』ひつじ書房
- 中俣均（1997）「方言区画論と言語地域区分」『人文地理』49-1、20-31
- 早田輝洋（1987）「アクセント分布にみる日本語の古層」『言語』16-7
- 早田輝洋（1994）「日本語と日本語周辺諸言語の音調システム」『音声の研究』23
- 早田輝洋（1999）『音調のタイポロジー』大修館書店
- 彦坂佳宣（2002）「地方語史の開拓と方言地理学」『方言地理学の課題』明治書院、277-292
- 彦坂佳宣（2011）「伝播の類型の視点からみた日本語形成史の試論的研究」『平成22年度科研費研究報告書』私家版
- 日高水穂（2007）『授与動詞の対照方言学的研究』ひつじ書房
- 日高水穂（2017）「接触」による方言分布形成」大西拓一郎編『空間と時間の中の方言』朝倉書店、21-38
- 平山輝男（1968）『日本の方言』講談社現代新書
- 藤原与一（1962）『方言学』三省堂
- 馬瀬良雄（1992）『言語地理学研究』桜楓社
- 馬瀬良雄監修（2002）『方言地理学の課題』明治書院
- 柳田征司（1993）『室町時代語を通して見た日本語音韻史』武蔵野書院
- 山口幸洋（2000）『日本語方言一型アクセントの研究』ひつじ書房
- 山口幸洋（2003）『日本語東京アクセントの研究』港の人

【付記】 方言研究者・真田信治先生（大阪大学名誉教授）が昨2022年11月13日にご逝去されました。直接の師弟関係はありませんでしたが、大学院の先輩としてのご縁もいただき、私信や学会等の機会に直接に、またご著書や論文等からも多くお教えいただきました。本論でも南北型の典型例として【図11】にあげま

したLAJ「つむじ風」図における「タツマキ・無回答」の北部偏在に対する「代用回答」という解釈は、気候（多雪）の影響ゆえの一事例として真田先生（1979）が最初にご指摘されました。母音の広狭がアクセントに影響する現象が北部日本に遍在することを初めて図で示したのも真田先生（2002）でした（【図15】）。先生は、雪の多い五箇山（富山県の旧・上平村）のご出身でした。若々しくお見受けしていた先生の思いもよらないあまりに急な知らせに加え、コロナ禍で最後のお別れに参じることかなわず、数日間心の行き場を失いました。真田先生（1979）は南北型境界線の位置を初めて提示した安部（1999）での重要な先行論文の1つです（【図11】）。本稿では初めてその境界線の史的位置付けを試みましたので、私事ながら、文字通りの拙論ですが、謹んで真田信治先生の墓前にご報告させていただき、学恩への御礼とさせていただきますたく存じます。

【掲載地図 目次】

A もっとも外側の分布圏——方言圏 α

- ア 一音節語の「長呼」の地域（【図1】LAJ「目」の長音地域で代表させる）〔本土+九州+琉球列島〕
- イ 「ヨム」（《数える》の意味）（【図1 & 図1①】LAJ. 69「数える」でヨムを使う地域）〔本土+九州+琉球列島〕
- ウ 「カザ」（《匂い》）（LAJ. 85「匂いを（嗅ぐ）」の「カザ」の地域）〔本土+九州+琉球列島】【図2】
- エ 「tone アクセント」の地域（早田（1987））〔本土+九州+琉球列島】【図3】

B Aの内側の分布〔本土+九州〕——方言圏 β （Aの琉球列島の分布がない）

- カ 「京都式アクセント」の地域（平山輝男（1968））【図4】〔本土+九州〕

C A・Bの内側の分布〔本土（畿内+四国+北陸）〕——方言圏 γ +北陸（Aの琉球列島と九州の分布がない）

- サ 母音連続が融合しない特徴を持つ地域【図5】〔本土（畿内+四国+北陸）〕
- シ 京阪式アクセント（金田一春彦）【図6】〔本土（畿内+四国+北陸）〕
- ス 「内輪方言」地域（金田一春彦（1964））【図7】〔本土（畿内+四国）〕
- セ 「近畿式方言」地域（金田一春彦（1955）第1次方言区画案）【図7-②】〔本土（畿内+四国+北陸）〕

【図1】

ア 一音節語の「長呼」の地域（LAJ「目」の長音地域で代表させる）

〔本土+九州+琉球列島〕—縦線+●黒丸

イ 「ヨム」（《数える》の意味）（LAJ.69「数える」でヨムを使う地域）

〔本土+九州+琉球列島〕—横線+○白丸

【音韻】

L. A. J. No. 110 EYE

〈目〉の言語地図

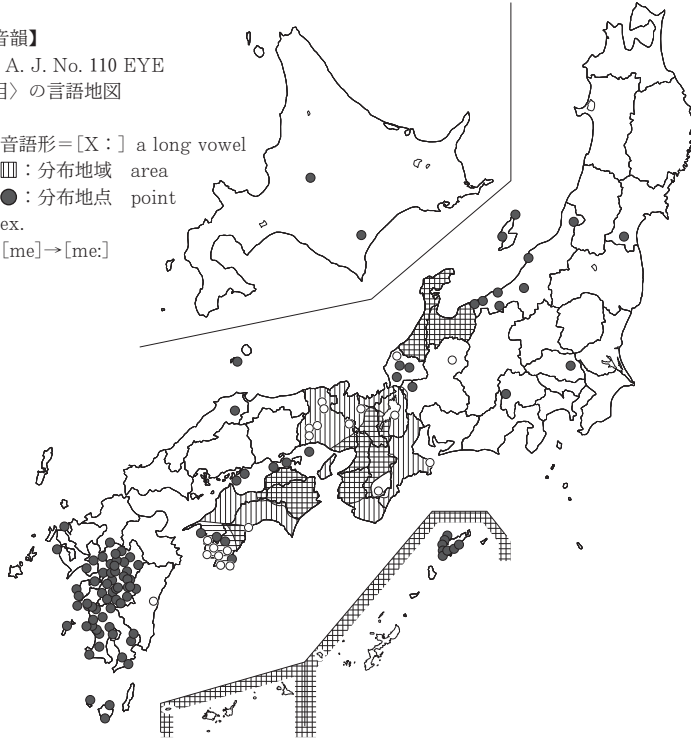
長音語形=[X:] a long vowel

▨：分布地域 area

●：分布地点 point

ex.

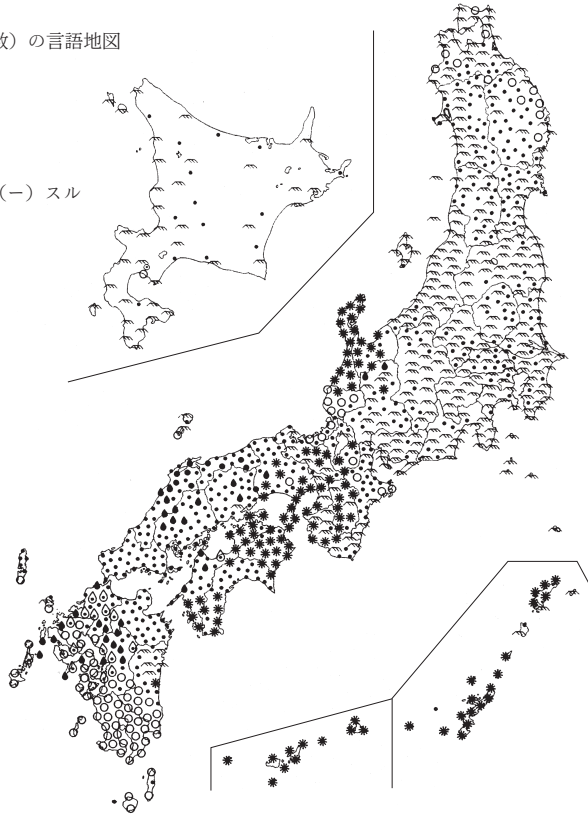
[me]→[me:]



【図1-②】「ヨム」（《数える》の意味）（LAJ. 69「数える」でヨムを使う地域）
〔本土+九州+琉球列島〕

かぞえる（数）の言語地図

- ・ カゾエル
- カズレル
- カズネル
- カンゼル
- ◇ カンネル
- ∩ カンジョ（一）スル
- * ヨム



佐藤亮一（2002）『方言の地図帳』より

【図2】「カザ」《匂い》(LAJ. 85「匂いを(嗅ぐ)」の「カザ」の分布)

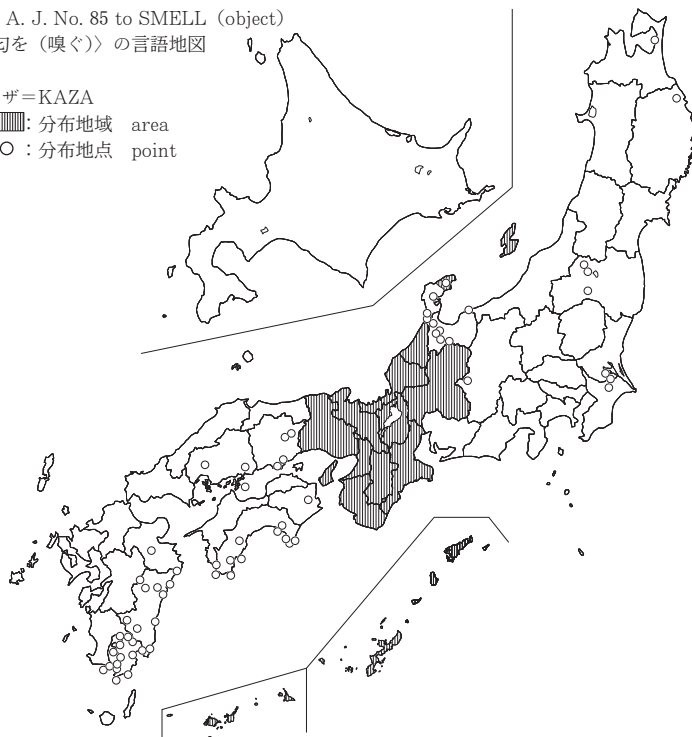
L. A. J. No. 85 to SMELL (object)

〈匂を(嗅ぐ)〉の言語地図

カザ=KAZA

▨: 分布地域 area

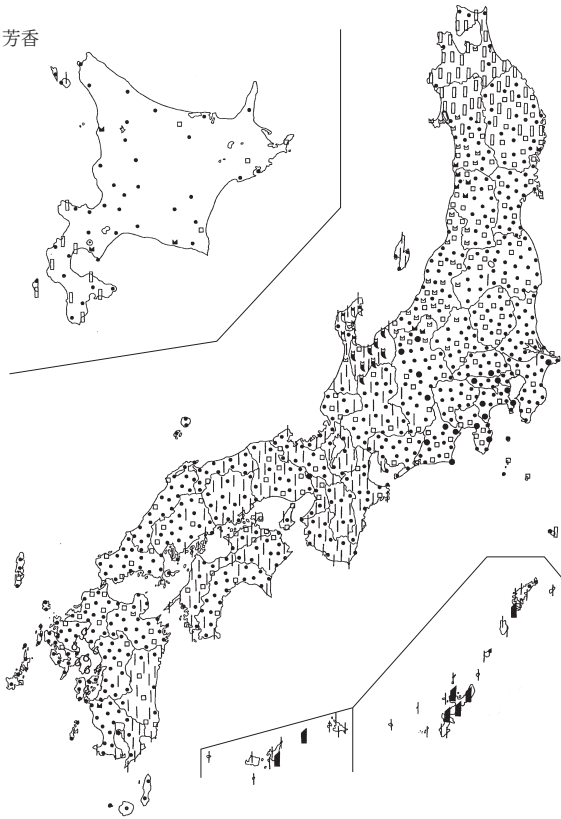
○: 分布地点 point



【図2-②】「カザ」《匂い》(LAJ. 86「匂いを（嗅ぐ）—後部分」より)

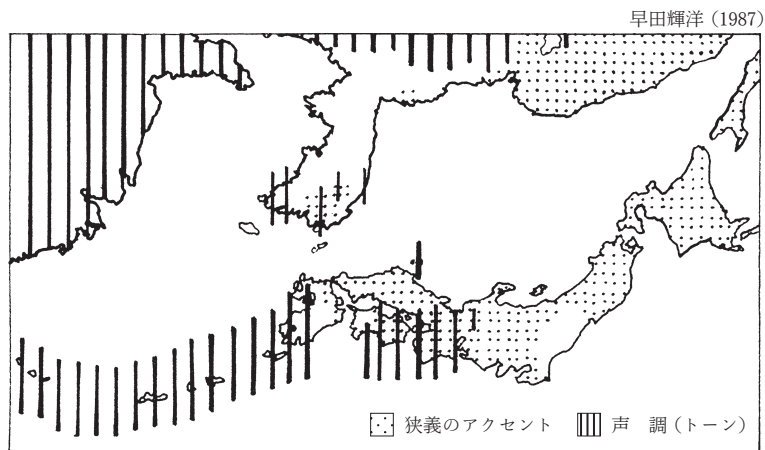
におい(匂)=芳香

- ニオイ
- ニゴイ
- ニメ(一)
- ┌ カザ
- └ カバ
- ▣ カマリ
- カオリ
- ◡ カ(一)
- ◡ カン
- ㄣ ホガ
- ㄣ ハナガ

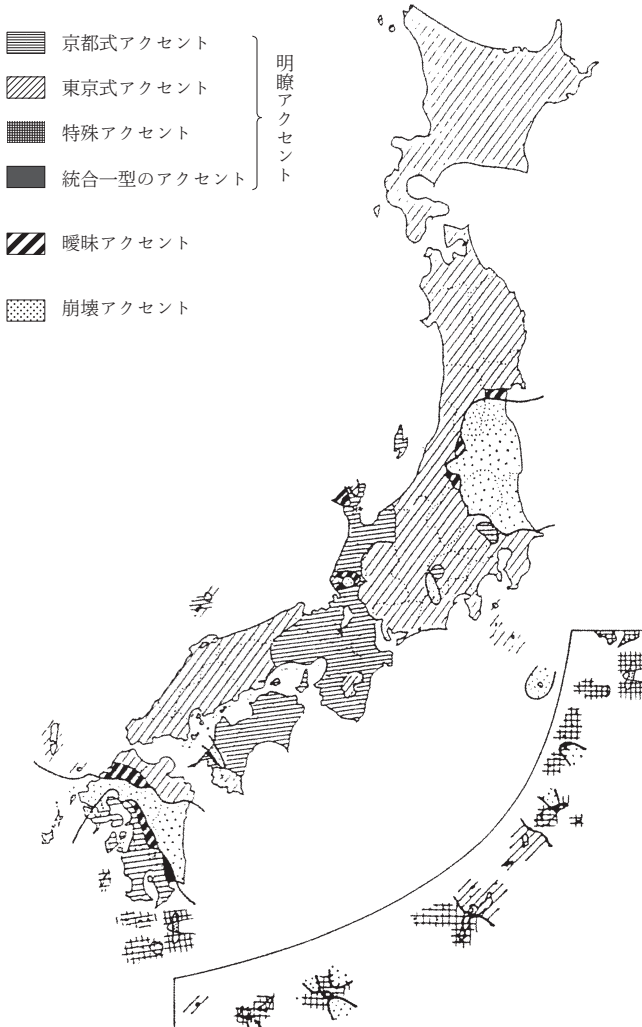


佐藤亮一(2002)『方言の地図帳』より

【図3】 tone アクセント—方言圏 α （早田輝洋（1987））

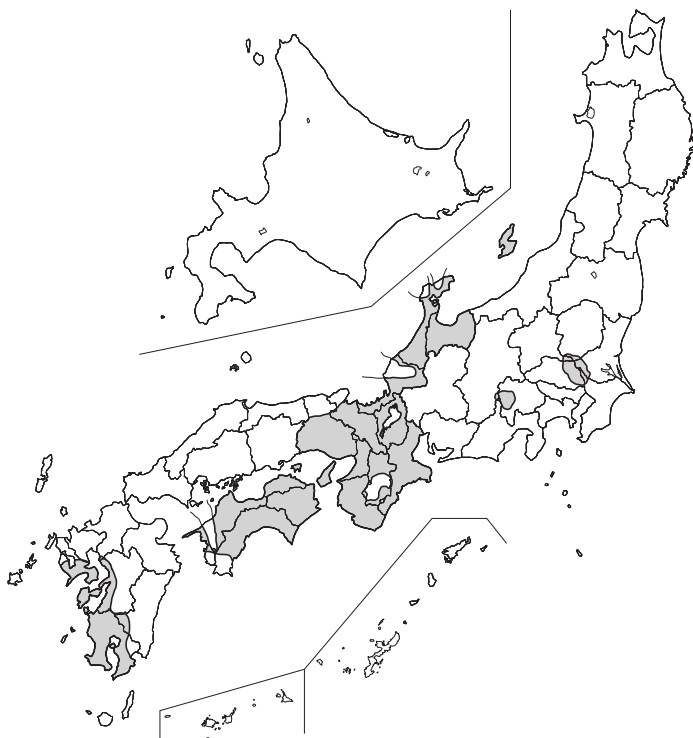


【図4】「アクセント」の地域（平山輝男（1968））



平山輝男（1968）アクセントによる方言区画

【図4-②】方言圏β：平山（1968）「京都式アクセント」の地域
（平山輝男（1968）より作図）



【図5】 母音連続が融合しない地域〔本土（畿内+四国+北陸）〕

母音連続（上野善道編（1989）の3地図の重ね合わせ図）（安部（2014））

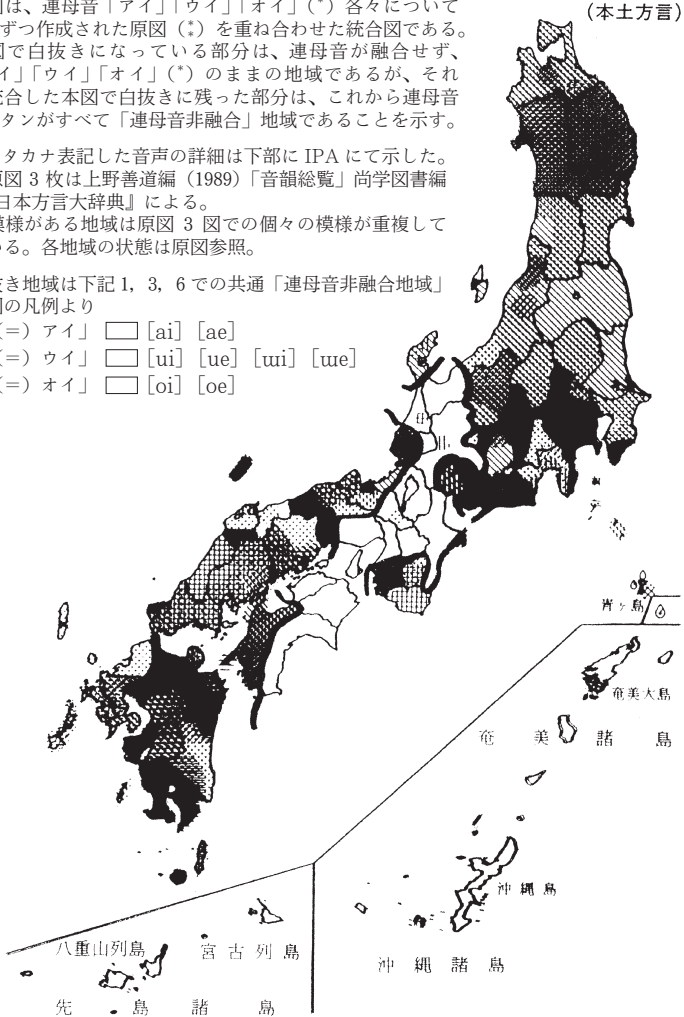
母音連続「アイ」「ウイ」「オイ」（*）に共通する「連母音非融合地域」

本図は、連母音「アイ」「ウイ」「オイ」（*）各々について1枚ずつ作成された原図（*）を重ね合わせた統合図である。原図で白抜きになっている部分は、連母音が融合せず、「アイ」「ウイ」「オイ」（*）のままの地域であるが、それを統合した本図で白抜きに残った部分は、これから連母音3ボタンがすべて「連母音非融合」地域であることを示す。

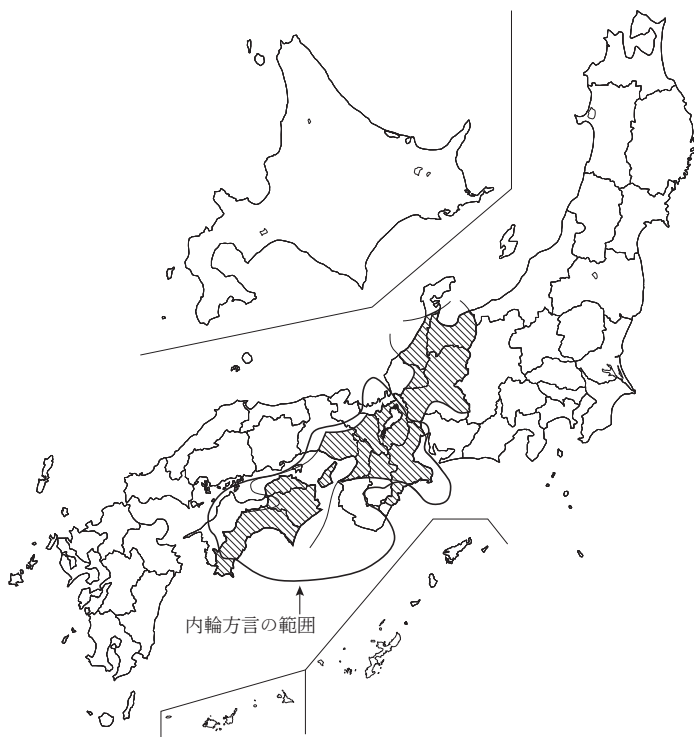
- * カタカナ表記した音声の詳細は下部にIPAにて示した。
- * 原図3枚は上野善道編（1989）「音韻総覧」尚学図書編『日本語大辞典』による。
- * 模様がある地域は原図3図での個々の模様が重複している。各地域の状態は原図参照。

白抜き地域は下記1, 3, 6での共通「連母音非融合地域」
原図の凡例より

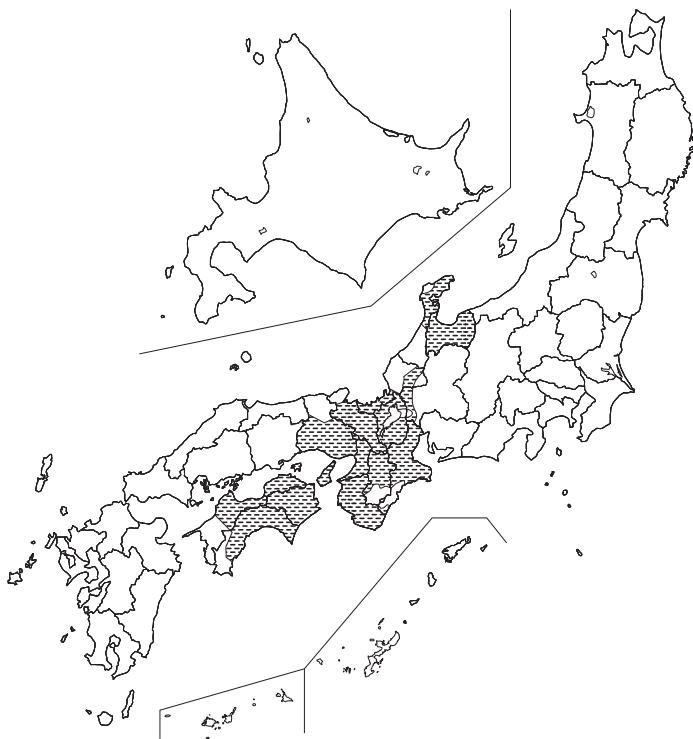
- 「1（＝）アイ」 □ [ai] [ae]
 「3（＝）ウイ」 □ [ui] [ue] [wi] [we]
 「6（＝）オイ」 □ [oi] [oe]



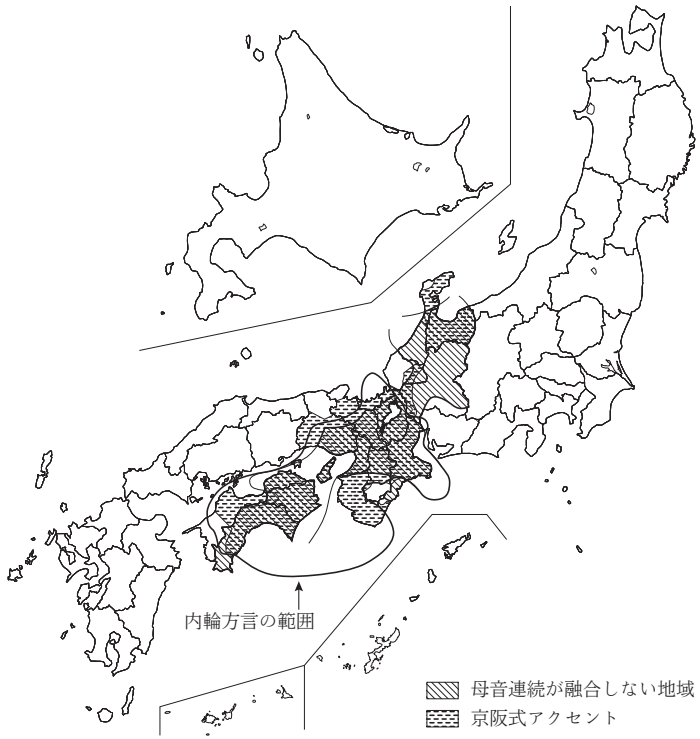
【図5-②】母音連続が融合しない地域
(図5の白地部分を斜線で表示)



【図6-①】京阪式アクセント（金田一春彦）〔本土（畿内+四国+北陸）〕



【図6-②】母音連続非融合地域と京阪式アクセント地域



【図 7-①】「内輪方言」地域（金田一春彦（1964）〔本土（畿内+四国）〕

金田一春彦の方言区画案 第二次案（1964）

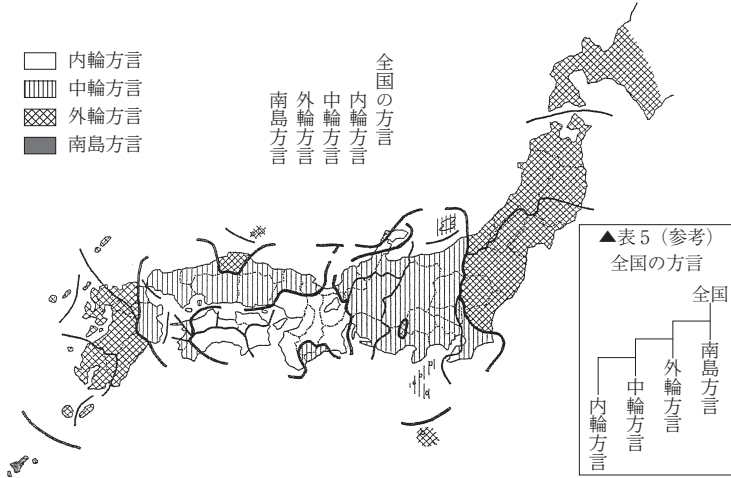


図 金田一春彦の区画（第二次） 昭和 39 年『日本の方言区画』による

【図 7-②】金田一春彦の方言区画案 第 1 次案（1955）

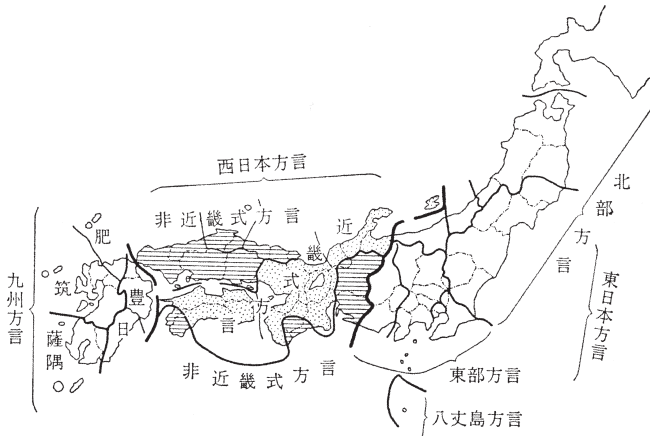
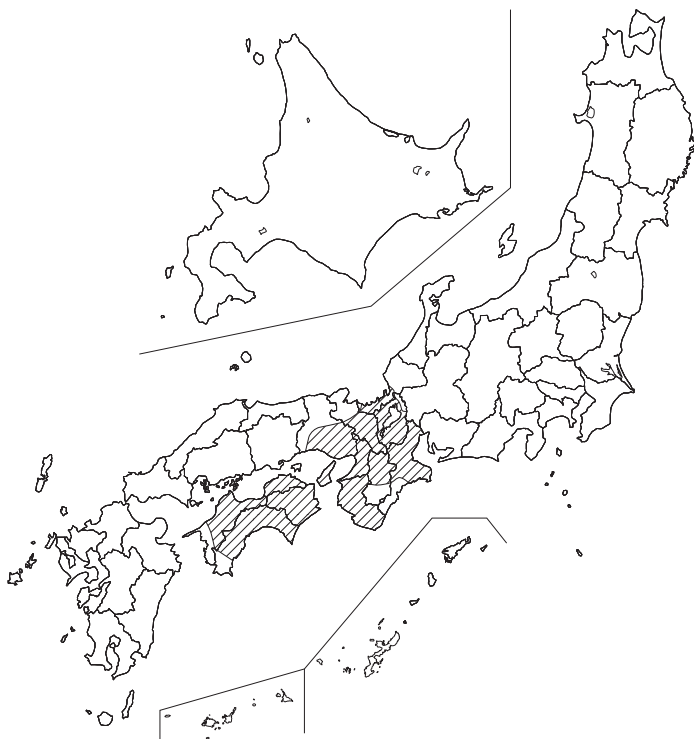
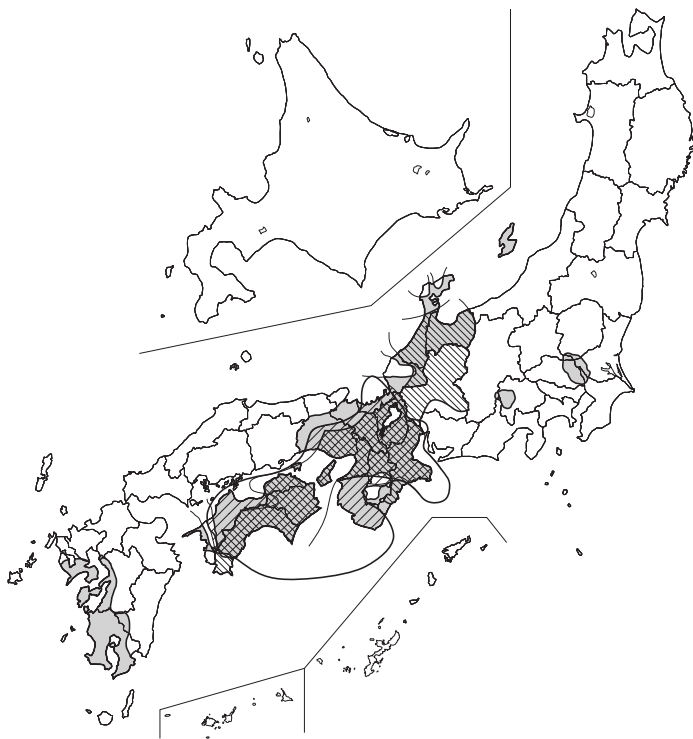


図 金田一春彦の区画（第一次） 昭和 30 年『世界言語概説』（下）による

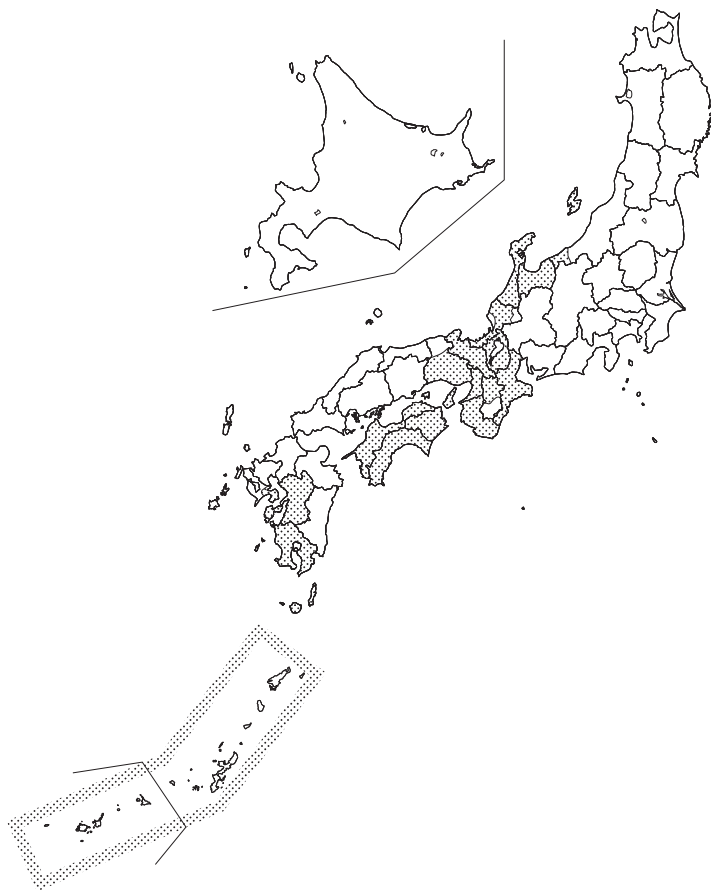
【図 7-③】方言圏 γ : 「内輪方言」(金田一 (1964)) の領域



【図8】方言圏β(図4②+図5②+図7③の領域の重ね合せ図)



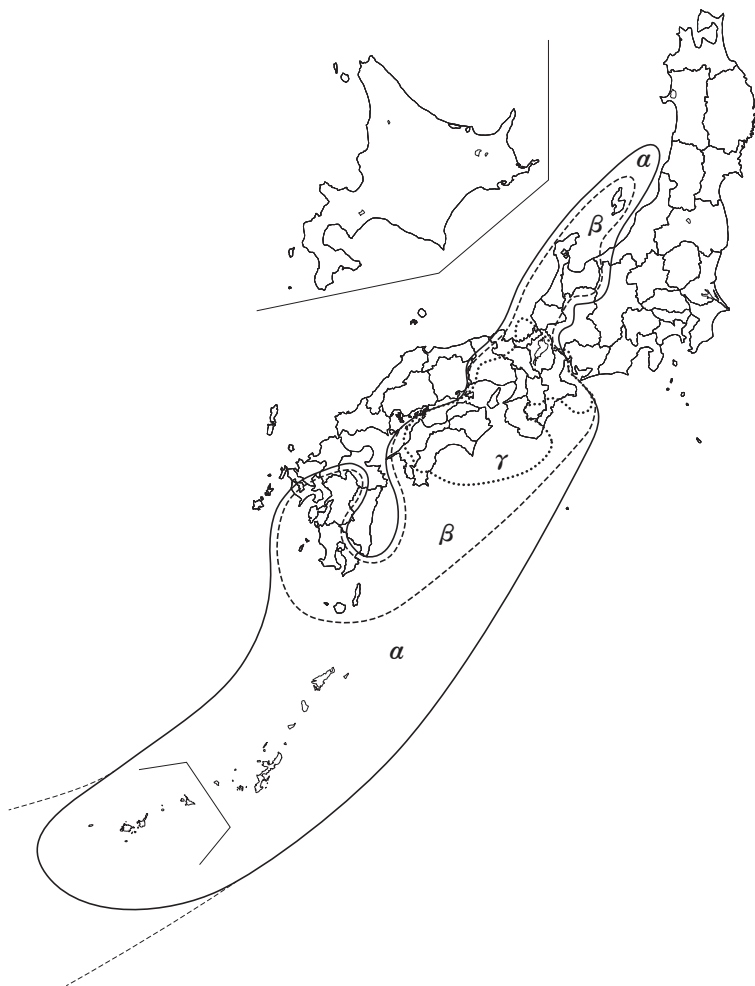
【図9】方言圏 α (図1・図3の領域)



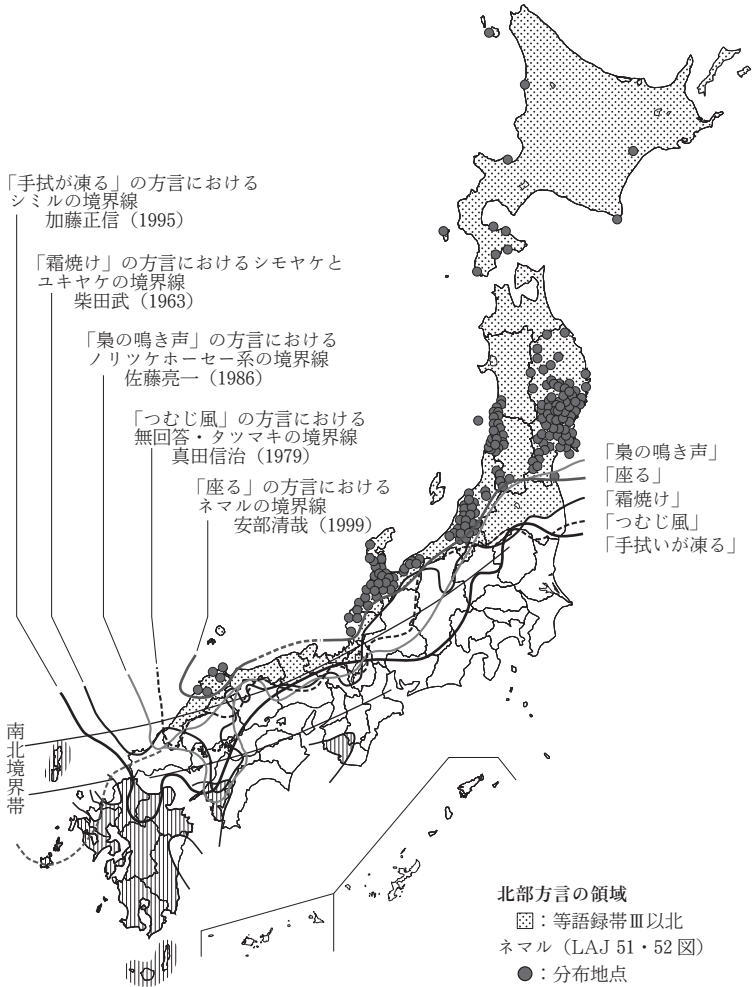
【図10】方言圏 $\alpha + \beta + \gamma$ (ABCの特徴の重ね合せ統合図)



【図 10-②】方言圏 α - β - γ の境界線



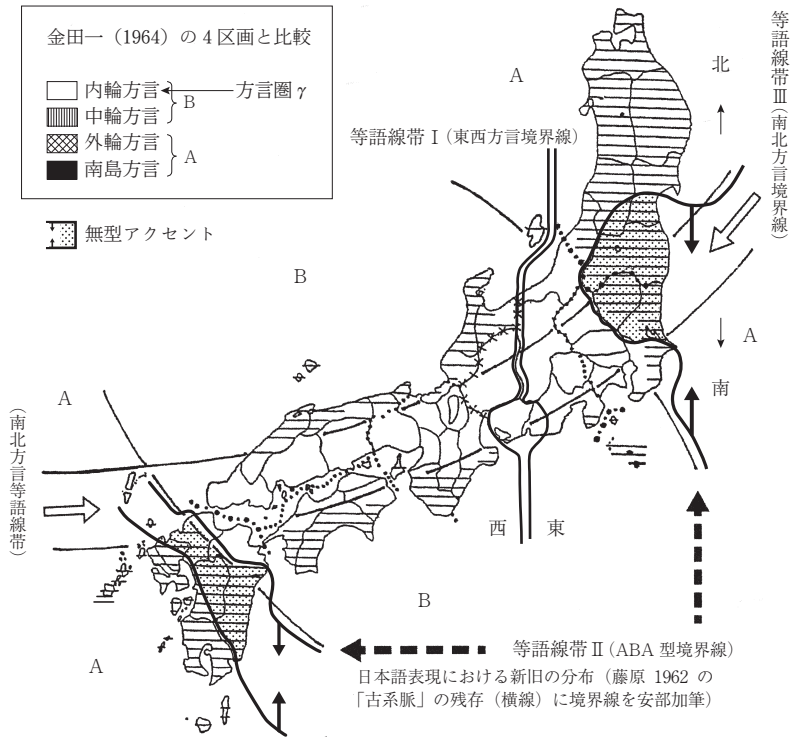
【図 11】 南北型方言境界線（等語線帯Ⅲ）



日本語文法の南北残存分布（アル型動詞一下二段型動詞）
（安部 2013 補正版 = 九州の点線は「旋風」の補正線）

南部方言
下二段活用の分布（平山 1968）
▣：分布地域

【図 12】 無型アクセント地域と等語線帯

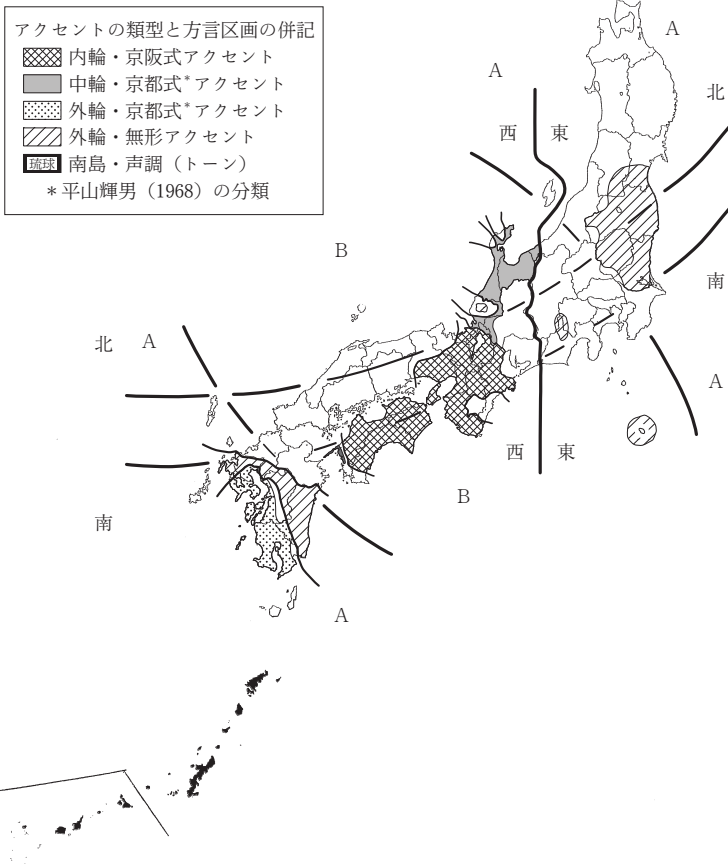


等語線帯 I・II・III から見た方言区画 8 区画

西 A 北	西 B 北	東 B 北	東 A 北
西 A 南	西 B 南	東 B 南	東 A 南

* 沖縄は別区画とする

【図13】 アクセント分布と等語線帯Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ



【図 14】イとエの非区別および連母音「エイ」《南北型の追加図》

◆南北型方言として地理的相補分布を示す。

北方型=イ・エの非区別：加藤正信（1986）

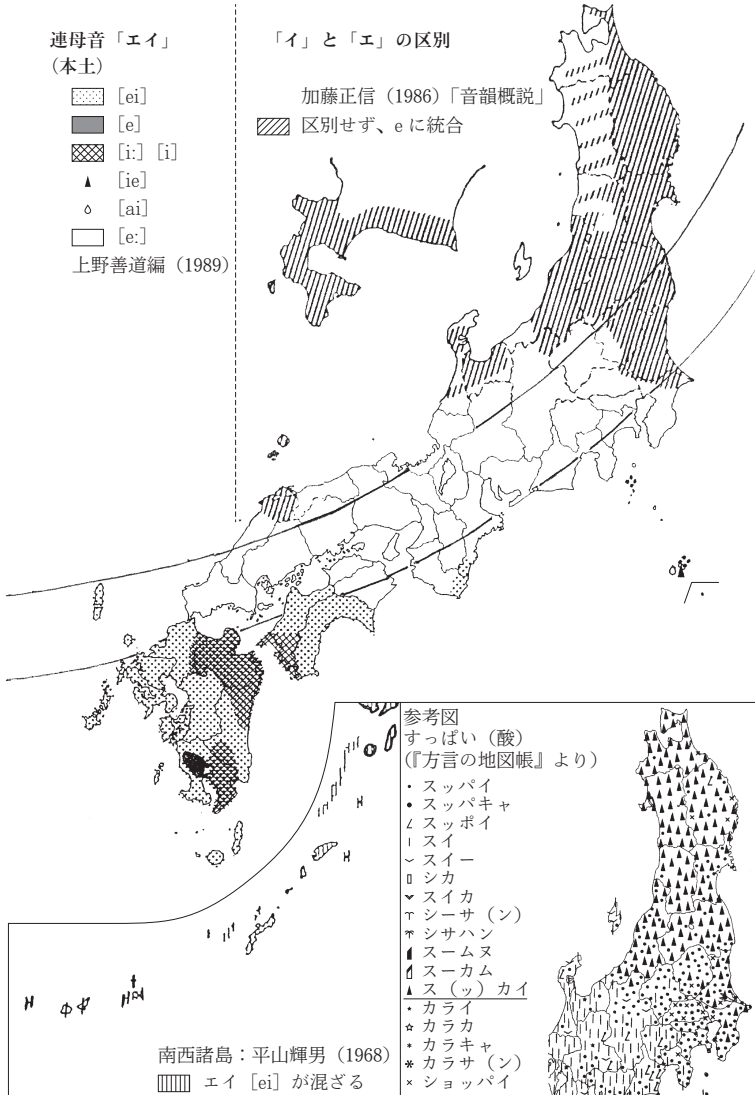
「音韻概説」

南方型=連母音エイ

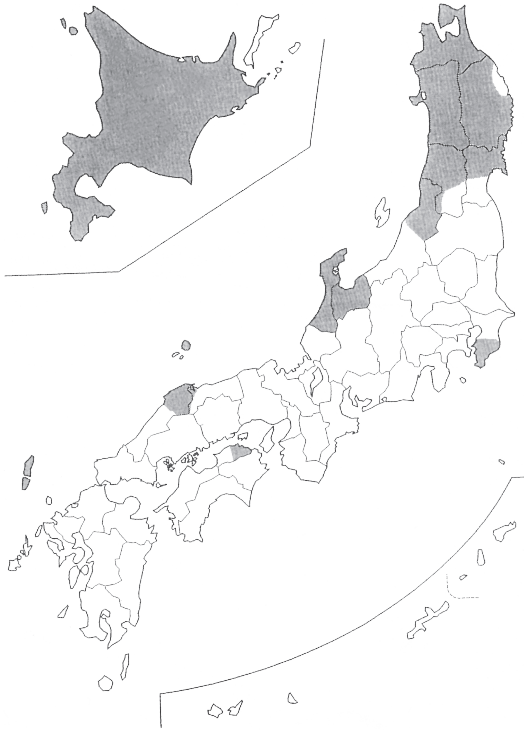
（本土：上野善道編（1989）「日本語音韻総覧」
 南西諸島：平山輝男（1968）「日本の方言」）

茨城・栃木での分布は、音韻での北方型に該当する下記の2分布と共通し、北関東での特徴と見なせる。

「スッカイ」（酸っぱい） ※参考図参照
 「キツ」（ひつ=糞） cf. 安部（2011.3, 2014.3）



【図 15】アクセントの北方分布—狭母音（i・u）の影響を受ける



▲▼アクセントが母音の
広狭により変化する地域
▲と変化しない地域▼
（口蓋性・唇音性？）
（分布図は真田信治 1989
より）
※房総半島には、徳島・
紀伊半島ほかからの歴史
的な移住が認められる。

参考表 母音の広狭によるアクセントの変化（真田信治 1989）
富山の独特な音韻規則

	東京	富山	京都
歌 (-a)	○●	○●	●○
川 (-a)	○●	○●	●○
胸 (-e)	○●	○●	●○
池 (-e)	○●	○●	●○
音 (-o)	○●	○●	●○
色 (-o)	○●	○●	●○
雪 (-i)	○●	●○	●○
橋 (-i)	○●	●○	●○
犬 (-u)	○●	●○	●○
夏 (-u)	○●	●○	●○

●は高く発音される部分
を示し、○は低く発音さ
れる部分を示します。富
山は、広母音（ア・エ・
オ）で終わる単語では尾
高形アクセント、狭母音
（イ、ウ）で終わる単語
は頭高形という規則があ
ることがわかります。